

学校評価の考察

1. 教職員

- ほとんどの項目で概ね90%以上が「水準を満たしている・上回っている」という回答結果でした。特に「主体的に対応できる力の育成」「いじめや問題行動の未然防止」「性教育の意義」では前年度と比較して意識が高い傾向が現れています。
- 反面、昨年同様「ICT教育の充実」で、31%が「水準を下回っている」と自信のなさが評価に現れております。しかしながら、苦手意識がありながらもコロナ禍で登校できない生徒の学びを保障するために全教諭で実践したオンライン授業や感染症対策で取り組んだオンライン寄宿舎活動を振り返ると、各々が期待以上のスキルを発揮していました。今後も実用的な活用推進研修やOJTによる資質向上の工夫等により、教職員が自信を持ってICT教育を実践できるよう努めてまいります。
- また、「障害者雇用制度や生徒の進路先についての理解」で、23%が「水準を下回っている」と評価しており、自信のない職員が4人に1人程度いることが分かりました。今年度は、「進路指導の手引き」冊子配布のみだったことを反省し、進路指導部や外部専門家を活用するなどして、障害者雇用制度や生徒の進路先について全職員の理解啓発に努めてまいります。

2. 保護者

- ほとんどの項目で概ね90%以上が「良好」という回答結果から、本校の教育にご理解とご協力いただいている様子がうかがえます。
- しかしながら、今年度も「就業体験を通しての生徒のあいさつ・言葉使い・身なり」や「言葉づかいの指導」で物足りなさを感じている保護者が一定数（12%）いるため、本校オリジナル「あいさつ・言葉づかいの心得」等の指導の工夫や生徒と教職員の日常的な会話の在り方を改善してまいります。
- また、「生徒の人権を尊重した対応」に努めていないと感じている保護者が11%います。教職員は、生徒に直接接し指導することで、その心身の成長発達を促進し支援する役割を担っていることから、人権尊重の理念についての認識を高め、生徒の人権を侵害する言動や対応をしない、また、教職員同士でも互いを尊重する態度を大切にする組織風土を創ってまいります。

3. 生徒

- ほとんどの項目で概ね80%以上が「良好」という回答結果でした。
- 学校の施設・設備に対する「水準を下回っている」が31%と突出して悪い評価でした。築30年以上の老朽化した寄宿舎の課題は、日常生活に直結しているため、生徒が身近に感じるストレートな意見だと言えます。今年度、懸案だったボイラーの取り替えや蛍光灯のLED化を実施しました。また、日々、修繕補修や畳の張替えを継続して行っています。今後、学校としても寄宿舎の改修等に向けて積極的に関係課と連携していきたいと思います。
- また、「特別指導」への不満（26%）は、指導を受けた生徒の本音のようです。これは、指導する教職員と生徒の両方の相互理解が大切だと思います。教職員側による「特別指導」の改善だけでなく、生徒組織の生徒会や舎友会が積極的にその課題点を取り上げ、明るい学校や楽しい寄宿舎生活ができるよう支援したいと思います。

4. まとめ

- 今回、浮き彫りとなった「本校職員がICT活用に自信を持つ」、「障害者雇用制度等の理解啓発」、「積極的な寄宿舎改修の取り組み」、「『あいさつ・言葉づかい』指導の改善」、「人権を尊重する組織風土創り」に今後努めてまいります。
- また、「『特別指導』の在り方」について、教職員と生徒組織が協働で再構築し、全員就職をめざし、明るい学校や楽しい寄宿舎生活を実践したいと思います。